

「膵切除のテクニックと患者管理」

久留米大学教授・第2外科 中山 和道 著

神戸大学教授・第1外科

齋 藤 洋 一

約30年の長いお付き合いを通して尊敬している学友の1人、中山和道教授が長年にわたる御経験をもとにして膵臓外科における集大成とも言えるべき、しかもこれまでの著者御自身の精魂がこの一書に込められた「膵切除のテクニックと患者管理」を上梓された。今般拝読する機会を得て、感じるどころがあったので多くの方々はこの書を紹介したいと思う。

私たちが日ごろ学会などで接する中山和道教授は、声も大きく動作も華やかなことから、手術もそのような大ぶりのメスさばきを想像される方が多いのではと思う。しかし、実際は全くその反対で、繊細かつ緻密で、安全を旨とした誠に丁寧なテクニックを駆使されることは、手術の現場を実見したり、あるいは学会などで供覧された映画やビデオを見れば納得されるところかと思う。

このことは著者御自身が文中でも書いておられるように、“消化器系臓器の中でも最も危険なエネルギーを貯蔵している膵臓”を対象として外科医の腕を養ってこられたことと同時に、血管外科の大御所古賀道弘先生の御薫陶を受け、血管外科を専門とする教室を背景とされてきたゆえではないかと拝察している。

ともあれ、本書の内容は、これら積年の豊富な御経験と御実績を集大成したものであるがゆえに、誠に簡にして要を得ており、本当に臨床上必要なことのみが180頁の隅々にまで網羅されている。また、ところどころCoffee Breakとして著者御自身の哲学が短い文章で宝石のようにきらりとした提言として挿入され、読者の目を楽しませてくれる。

簡単に内容のさわりを紹介すると“1. 膵手術にぜひ知っておきたいアナトミー”では、膵癌取扱い規約の要点が整理した形で記述され、膵を取り扱う臨床家としての必読の内容に限定されている。“2. 手術適応と術式の選択”は、症例に対峙したときの臨床家が悩む問題について、種々の条件が設定された良きガイドとなっている。“3. 愛用する小道具”では、デリケートできれいな膵の手術を行うのに有用な小道具の紹介がある。“4. 膵への到達法”では、十分な視野が得られる方法が推奨されている。“5. 術中検査”では、USの有用性が強調され、更にそれに基づく生検の方法にも触れられている。“6. 膵断端の処置”では、膵手術のトラブルメーカーである膵液の処理方法が述べられている。“7. 膵切除術”では、本書の目玉である膵頭十

二指腸切除術を中心に、種々の膵切除術の要点が詳細に記述され、各ポイントでの注意点、コツが披露されている。しかも、多くの図や写真でわかりやすく理解できるような工夫もなされている。“8. 膵管空腸側吻合術”、“9. その他の膵手術”に次いで、“10. 術前・術中・術後の患者管理のポイント”として、“高度な手術には優秀な患者管理の裏付けがなければ不可能”という著者御自身の日ごろの自論に基づいた具体的な管理上の要点が記述されている。

通読すると、日ごろの著者の手術の場面が彷彿と想起されるような、むだのない、そしてポイントをしっかりと捉えている一書である。既に膵臓外科の専門家たる方々も著者の全人格を理解する糧として、あるいは自らの手術をチェックする材料として一読をお勧めするものであり、また、これから膵臓外科にチャレンジされる若い方々にとっては最も簡潔明かなガイドブックとしてお勧めできるものと考えている。

● B5横判 192頁 図154 写真45
原色図40 色図2 1994 定価
16,480円(税込) 円400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)